

大阪・船場

オフィス街からスツ姿のビジネスマン、OLが消えた。大型連休を迎えた大阪・船場は、御堂筋のイチヨウ並木が初夏の日差しに映える。

戦前・船場の商家で生まれ育った姉妹らの暖簾への誇り、美意識、書がある三島佑一さん(83)は、谷崎の随筆「東京をおもふ」の一節を挙げる。

「谷崎は船場に相当な思い入れがあったんじゃないかな。船場の出身で「谷崎潤一郎と大阪」の著書がある三島佑一さん(83)は、谷崎の随筆「東京をおもふ」の一節を挙げる。

私は船場や島の内あたりを歩いて、小ぢんまりした格子作りのしつまつた家だの、昔風な土蔵作りの老舗の前を通つたりすると、昔の日本橋の町の様子や小学校時代の友達の家などを思ひ浮かべるのである。

当時の船場は、土蔵作りの老舗店が並び、川に囲まれていた。谷崎は生まれ育った東京・日本橋界隈の光景と重ねていたのだろう。

「細雪」のほか、「春琴抄」でも「こいさん」という呼び方を使い、上品な響きを持つ船場ことばへの愛着がうかがわれる。それでも、谷崎は「細雪」のなかでほとんど船場を描いていない。



三島さんは「谷崎が描きかけたのは豊かな暮らしぶり、いわば、店の奥、上がりかまちから上の女の世界。商売の競争がある表の世界には関心がなかったのだろう」と推測する。

上品なことばに傾倒

船場の商家暮らしはどうだったのか。船場のラシャ問屋で育ち、芦屋で暮らす藤岡和子さん(90)は「丁稚さんと番頭さんを合わせると50人ぐらいいましたなあ。ちょっと外出する時も女中さんが付いてくるのが窮屈で」と振り返る。父は「だんさん」、母が「御寮人さん」、姉は「とうさん」で、自身は「こいさん」と呼ばれていた。「当時の番頭さんは最近まで私を「こいさん」と呼んでいました。船場ことばは美しくて柔らかな」大正末期から昭和初期にかけて、日本一の人口に膨らんだ大阪



細雪で使われた「船場ことば」を今に伝える企画を続ける「北船場くらぶ」代表の藤岡さん。後方の高層マンションと商業施設が立つ場所「三越」があった(大阪市中央区)

メモ 船場は、土佐堀川、長堀通、東横堀川とかつての西横堀川に挟まれた地域だ。「細雪」はこの地で名をはせた「蔦岡商店」の暖簾を「家来筋に当たる同業の男に譲り」、蔦岡家が船場から引き揚げた後の物語で、土地の描写は少ない。計理士をする、次女・幸子の夫・貞之助の事務所が、三越近くの「枳殻今橋」にあると記されるなど、わずかな登場にとどまる。作品中、4姉妹やお手伝いさんが使うのは、「御寮人さん」などの「船場ことば」だ。

市は「大大阪」と呼ばれ、船場はビジネスの中心地だった。築年数を重ねたモダンな洋風建築ビルが今も所々に威容をとどめる。「細雪」のモデルになった松子が谷崎と結婚する前に嫁いでいた船場の根津商店の跡地を探していた本町通に面した丸紅大阪支社のビルがそびえる。谷崎の目にも映ったろうか、瓦屋根の商家は見あたらぬ。「細雪」で、四女・妙子が舞を披露した高麗橋の三越も、2005年に閉鎖された。きょうは、ほんまに温うて、ええお日和さんで、ごんなあ。三越跡地の工事現場の扉に、06年秋から約2年、船場ことばが掲げられ、注目を集めた。企画したのは、地元市民グループ「北船場くらぶ」。船場のまちと文化を愛する商店主や会社員らが、消えつつある船場ことばを伝承する取り組みだった。



ミシンと扇風機(昭和初期)

小説「細雪」の四女・妙子は、自立心旺盛で因習にとらわれない女性。洋裁留学を夢見てミシンを踏み、はだけた胸に扇風機で風を送る。重厚な鉄製のミシンと扇風機は、妙子という存在の実感を与えてくれる。芦屋市立美術博物館蔵。(井上勝博・芦屋市谷崎潤一郎記念館学芸員)

芦屋市谷崎潤一郎記念館(兵庫県芦屋市伊勢町12の15)で6月26日まで開催している春の特別展「四姉妹の昭和よみがえる『細雪』の世界」で展示

くらぶ代表で、両親が船場の南社に勤めていたという澤田充さん(50)は「船場ことばは絶滅危惧種。このまちの文化が根付いたことばを次世代につぎたい」と言い、船場ことばをテーマにしたトークショーや朗読劇が続いている。「細雪」をたどる系は、まだ、途切れていない。(岡田健彦)